

「幼児とのはからい」を

河邊 杲

この夏、蕪村の句集の中に「風鈴や 花にはつら
き 風ながら」という句を見つけてはっとした。私
自身、風鈴の澄んだ音色に魅せられて、東北への旅
などで南部鉄でつくられた風鈴を買って帰る。夏に
はそのいくつかの風鈴をあちこちにつるしてたのし
むのだが、気に入る音色をみつけるのに困って終
う。困るといいながらそれをたのしんでいる節もあ
る。

しかし、いまだかつて、生命みじかき花の心にま
で想いを寄せて風を感じ、音色に耳を傾けたことが
なかったことに気づかされた。

ひとつのことに興味や関心を抱くとそれに夢中
になって、まわりの風景に目や耳をかざないことが多
い。ましてや、物や人の心に及んではなおのことで
ある。注意を集中させるとか興味の中心に心をかよ
わせると言っても、その対象のまわりをうとんずる
ことではない。

現代の人間について、自然や環境との遊離が問題
にされて、まわりへの心くばり気くばりが弱くなっ
て来ていることを指摘するのは、この蕪村の心境や
姿勢から遠ざかりつつあるのを感じるからではな
らうか。「心くばり」というよりも、もっとまわり

の世界とつながっている自然さから言えば、ほんとうの意味での「はからい」とも言うべき心づかいなのではなからうか。

このことは身体の方からも言える。寺田寅彦の随筆「手首について」の中で、バイオリンやセロのよい音色は、弓による弦の振動だけでなく、手首の動きも重要な要素であり、それも考えてみると「心の手首」が自由に柔かく弾力的であることが必要だと、自分の体験から説いていることからもうなずける。

古くから心や身体の柔軟さはいろいろな形で説かれて来ているが、自然との融合が弱くなればなるだけ人間はバラバラになってしまうと考えると、心や身体の柔軟さも、自然との融合と無関係ではなさそうである。

幼稚園教育要領が改訂された機会に新鮮さをとりもどし、真の幼児教育のあり方を求めて創造的に前

進していきたいと念願するのだが、教師が目標や経験内容だけにこだわっての熱心さだけでは決して前進していかないことは火を見るよりも明らかなことである。それは幼児の教育が「幼児の生活」を第一義とするからであらう。幼児の生活に即応しての目標や内容への熱心さでなければならぬのだが、事実はどうなっているのか。発達の一般論理に照らしてのみ考えていて「幼児の世界」のことを考えていると思ひ込んでいないだろうか。

そのためには、私たち教師自身が、心や身体の自然なる働きを柔軟にして「幼児とのはからい」に大いに心を致したいと思う。

ギリシャ時代より教育は「概念くだき」だと心得られて来ている。私たち幼児教育にかかわる者自身がこの辺で「概念くだき」をする必要を痛感するのは私だけだろうか。

(洗足学園短期大学)